8　曲直瀬道三の妻・介石宗祐の系譜とその時代

葉山美知子
京都医学史研究会

曲直瀬道三（1507～1594）は，中世から近世に日本が大きく変貌した16世紀に生きた医師である．道三の医学者としての研究は過去にあまたなされてきたが，暮らしの中の道三とその人物像は具体的に浮かびにくい．そこで今回の発表は，道三の妻をめぐる人物たちの系譜からみた人間道三のあらたな一面を模索することにある．

道三の妻は『寛政重修諸家譜第593』によると「橘氏　今大路　　正盛　一渓道三」の項の末尾に一行のみ「妻は庭田中納言重親が女」と記載されている．また『今大路家記鈔』には戒名の項目に「介石宗祐大姉　元和六年九月四日……右之牌面洛之十念寺有之」の記述がある．現在，京都上京区寺町の十念寺には「一渓道三居士」の墓があり，その右隣に「景福院介石宗祐大姉」と刻まれた妻の墓がたつ．以下，妻の呼称は法名「宗祐」とする．まず宗祐の系譜に関わる氏族は，庭田氏・中山氏・今出川（菊亭）氏・河崎氏である．★庭田氏…中級の公家で家職は神楽，笛や篳篥を奏す．宗祐は中納言庭田重親（1495～1533）・女であり，1530年頃～1620年の長寿であったが，実は父重親は権中納言中山宣親（1458～1517）の次男である．★中山氏…藤原北家花山院流の支流，家職は有職故実．

ともあれ重親は37歳で没した庭田重経の養子になって庭田氏を継いだ．ところが天文2年（1533）12月，奈良春日大社の恒例若宮神社の七ケ夜神楽例祭で頓死し，39歳であった．時に宗祐は5歳程であったか？　しかし，宗祐が道三と婚姻する天文16年（1547）の時点では河崎乗三の養女になっている．『曲直瀬家譜』に「（天文）十六年，再迎室，蓋河崎氏某之養女也，河崎氏某者一渓之姉聟也」の記述がある．即ち，道三の姉の夫であり2年後に生まれる玄朔の父である．前述『諸家譜』の正紹（玄朔）の項に父は河崎乗三某と記されている．★河崎氏…出自は不明であるが，筆者は京都賀茂氏族の下社社家に属する氏人で鴨縣主の可能性が高いと考えている．★今出川氏…宗祐の母は今出川氏（菊亭）の出身である．家格は高く，家祖は太政大臣西園寺実兼四男の兼季（1281～1339）で号が今出川であった．宗祐の祖父は今出川季孝（1479）にあたる．その息子公彦の嫡男右大臣菊亭晴季（1539～1617）は宗祐のいとこである．晴季は豊臣秀次側近であり，娘は秀次の正室になる．秀次事件で晴季は越後に配流，娘は三条鴨川で他の妻妾と同様落命した．一方，宗祐兄・庭田重保（1525～1598）はいとこの中山孝親と信長四人之衆といわれた武家伝奏で信長と繋がり朝廷・公家の交渉役を務めた．その重保の嫡男重具は宗祐の甥になるが，明智光秀の娘を娶っていて，嫁の姉妹に細川ガラシャもいたので本能寺の変と深く関わることになる．また重具の兄弟保忠は秀次に出仕，事件後は出家した．

まとめ：道三の妻・宗祐は本能寺の変（1582），秀次事件（1595）という歴史的大事件に自身の父方母方双方の家系が少なからず関与していたことに無縁ではありえず，曲直瀬家の暮らしに相応の影響を与えたのではないだろうか．夫の道三自身も晩年にキリシタン改宗（1584年12月）で宣教師の話題になっている．その上，道三の没後ではあったが二代目道三玄朔が，秀次の医師集団の統括者として常陸に配流されてしまう．宗祐の16世紀後半は，夫曲直瀬道三が医学的文化的分野で当代一流の栄華を極める一方，時代を揺るがす大事件に向きあい，曲直瀬学統が恙無く繁栄するよう一族への目配りに気の抜けない日々であったに違いない．